

大けがで得た いのちの生かし方。

鶴岡教会 富樫哲一さん

山形県鶴岡市鼠ヶ関港で漁師として働いている富樫哲一さんは、平成28年10月、出漁中に死を覚悟するほどの大けがを負った。自力で起き上がることもできない苛立ちから、身の回りの世話をしながら家計を支える妻に対して、「俺の気持ちがわかるか!」ときつくあたることもしばしば。心情をある人に吐露すると、「生かされたいのちだから、これからは人さまの幸せのために骨を折る菩薩行を」と諭された。その言葉は富樫さんの胸にストンと落ちた。漁師という仕事柄、家を空けることが多く、二人の息子の育児は妻任せ。認知症の母のことも献身的に介護してくれた。〈自分はどれだけ妻に支えられてきたのか〉——自己中心だった生き方を見つめ直した富樫さんは、これからの人生の目標が定まった。それは、「人さまのために骨を折る」こと。



観音さまを念ずる

法華経の「観世音菩薩普門品」は、「観音経」とも呼ばれて、たくさんの人に親しまれています。そのわけは、私たちが苦悩するとき、一心に観音さまを念ずれば、観音さまはすぐにその声を聞き届け、救ってくださる、という教えに勇気をもらい、観音さまを信じて慕う人が多いからであります。とはいえ、私は、観音経は単に念ずれば救われる、助かると教えるものではないと受けとめています。なぜなら、「観世音菩薩普門品」が法華経のなかの教えだからです。観音経には、法華経の精神がこめられているからです。

その一つが、自らの可能性を自覚することの大切さです。「観音妙智力」という言葉があります。苦しみの底から立ち上がり、その苦を糧に成長できる底力が私たちにあつて、それが「観音妙智力」だということです。つまり、観音さまとは自分自身のことにはかならず、そのような自己の可能性を信じ、内なる観音の力を信じて一心に念じるとき、私たちの心には安心感とともに気力が湧いてくる——それが、苦から救われるということなのです。